

保育士養成課程の学生に対する英語学習に関する追跡調査：
ESP (English for Specific Purposes) アプローチの視点から

加茂 葉子¹⁾・藤原 愛²⁾

Needs Analysis of Students for the Purpose of Developing
an English Language Curriculum Introducing English
for Specific Purposes (ESP) :

The Follow up Study for the Students Majoring
in Early-childhood Education

Yoko Kamo and Ai Fujiwara

Abstract

ESP (English for Specific Purposes) approach to English program has attracted attention as one possible direction in English education in Japan. An increasing number of English teachers or researchers have reported their work in ESP in general and in some discourse communities, such as business, engineering, nursing, medicine and social science. The purpose of this study is to explore the specific English language needs of prospective kindergarten teachers studying at a private college in order to develop an English Language Curriculum introducing ESP approach. This is a follow up study of the needs analysis conducted by Matsuzaki (2006). The questionnaires were distributed to 89 freshmen majoring in early childhood education at a private college in Gunma. The statistics showed that the participants (1) prefer “traditional” English class to communicative one (2) want to acquire practical or authentic English (3) want teachers to use movies, TV programs or songs for children as teaching materials. While the students seem get used to “traditional” style of learning conducted in high school, they need to experience communicative activities in order to learn practical English. The result of this study will provide valuable insights for the possibility of incorporating ESP approach to the English program.

keywords : ESP (English for Specific Purposes), English education, curriculum development,
Needs analysis, Early-childhood education major

キーワード : ESP, 英語教育, カリキュラム開発, ニーズ分析, 保育専攻

1) 育英短期大学非常勤講師

2) 育英短期大学現代コミュニケーション学科

1. はじめに

近年の大学英語教育では21世紀のグローバル化時代に対応する一つの方向性としてESPアプローチが注目されている。ESP (English for Specific Purposes) は、「特定目的のための英語 (に関する研究および実践)」あるいは「専門英語教育(あるいは研究)」と一般的に呼ばれており、EGP (English for General Purposes)、「一般的な目的のための英語」の対立概念として捉えられる。すなわち、学習者の特定の目的を達成するために、特定のタスクを効果的に実践できるように手助けする言語教育がESPなのである。

ESPアプローチが大学英語教育で注目されている理由の一つは、より実践力を求める社会的なニーズに対応するためである。日本の大学英語教育では長い間、英語は「教養のための英語」としての位置づけであった(深山編、2000)。しかし、近年では一般教養としての英語に留まらず、学生の専攻に合わせ、より専門的で実用的な要素の高い言語教育を提供しようとする動向があり、日本の大学ではESPを取り入れたカリキュラムの開発が一層求められている(寺内編、2010)。また、ESPを一年生から「一般英語」に導入し、新たな目標を設定することにより英語学習に対する動機を高める可能性もあるという観点から、大学入学直後からカリキュラムに導入する有効性も示唆されている。大学入試のための「受験英語」勉強に精進してきた学生は大学入学を機に英語学習の目標を失っていることが多く、英語を専攻する学生以外は入学後英語学習に意欲的に取り組む学生が少ない傾向があるが、一年生から「一般英語」にESPを導入することで、英語の学習動機を取り戻せる可能性があるからである。(寺内編、2010)。

ESP教育のプログラムでは、明確な目的を持って展開するために、まず「ニーズ分析」を行うことが必須である。言語教育におけるニーズ分析とは、「学習者が将来どのような目的や状況で外国語

を使うようになるのかを予測し、それを基にどのような言語能力を伸ばす必要があるのか(ニーズ)を分析することである」(深山編、2000、p.12)としてあり、学習者の立場に立ったニーズに焦点を置いた定義づけをしている。

ESPのニーズ分析をする上での情報源である3つの領域として、①ディスコースコミュニティのニーズ ②教師および大学のニーズ ③学習者のニーズがある(深山編、2000)。

このようなニーズ分析を含むESP教育の実践、およびその研究は主にビジネス、医療、看護、科学、工学系の分野では盛んであるが、保育の分野におけるESP研究は、大須賀(2006)、松崎(2008)が行っているがまだ十分とはいえない。

本研究は、これらの先行研究の延長上にあり、地方短期大学の保育専攻の英語学習者のニーズを調査し、先行研究のデータと比較したものである。まず大学英語教育におけるESPの位置づけと保育の分野におけるESPの先行研究について概観する。そして、松崎(2006)が行った保育専攻の学生に対するニーズ分析に関する先行研究を基に本学の保育専攻生に同様の調査を行い、①学生の英語学習に対する学習スタイルや好み②身に付けたい英語能力③受講したい授業④子どもに関係する英語の授業という観点で、その結果を先行研究と比較検討し、本学学生のニーズを探ることを目的とする。

2. ESPとは

ESPとは「それぞれの学問領域や職域に応じて固有のニーズが存在し、そのニーズによって同質性が認知され、異質性も生じてくる。そして、同質性が認知された各専門領域内では『ディスコースコミュニティ』集団が形成され、その目的を達成しようとする。その場合、各集団の内外において明確かつ具体的目標を持って英語が使用される。その際の言語研究および言語教育」(深山編、

2000, p.18) と定義されている。

ディスコースコミュニティで行われる、会話やスピーチなどの様々な種類のコミュニケーションの各イベントのことを「ジャンル」というが、「ジャンル」の概念を利用した ESP の考え方は有力な教育方法の一つになる(寺内、2010)。というのも、自分がこれから進む分野でどのような英語が使われるかを理解し、どのように学んでいくかを考えることができるからである。

特定目的を達成するための ESP 教育を捉える上で、ESP は目的の種類に応じて English for Occupational Purposes(職業のための英語、以下 EOP) と English for Academic Purposes(学術目的のための英語、EAP) とに分類されることができると考えられている。EOP は職業専門家の English for Professional Purposes と一般職業人のための English for Vocational Purposes に、EAP は大学や研究機関で行われるもので、English for General Academic Purposes(一般学術目的のための英語、以下 EGAP) と English for Specific Academic Purposes(特定学術目的のための英語、以下 ESAP) に下位区分される。つまり、ESP 教育の大きな特徴は学習者が実際に英語を使用する場面であるディスコースコミュニティのニーズを捉え、そのニーズを反映して英語教育を行うことにある(寺内、2010)。

3. 先行研究

3.1. 英語学習動機への効果

大須賀(2006)は保育者養成の短期大学で3領域からのニーズ分析を行った上で、ESP 的アプローチを用いた英語カリキュラムをデザインし、実践し、ARCS 動機付けモデルを基に作成された授業評価アンケートを用いて調査したところ、このアプローチは英語の学習への動機づけを高めるという点で一定の効果があったと報告した。学生の動機づけと授業評価の関連性については、動機

づけの高い生徒ほど授業を高く評価する傾向があり、英語習熟度と授業評価については、英語習熟度の高い学生ほど授業を高く評価する傾向が顕著に見られたものの、「英語が自分に関わりがあるという観点」においては、英語習熟度の高低に関わらず有意な相関関係は見られなかったと報告し、ESP 的アプローチの有効性を実証している。

3.2. 学習者のニーズ分析

松崎(2008)は、保育士養成の大学で ESP 的アプローチの第一段階として、保育専攻の学生の英語に対する学習者のニーズを EGP 的な観点(①英語学習に対するスタイルや好み ②卒業までに身に付けたい英語の能力 ③受講したい英語の授業)と ESP 的な観点(④将来の進路と子どもに関係する英語の授業)から心理専攻の学生と比較して分析調査を行った。その結果心理専攻と保育専攻の学生の間では EGP 的な観点では両専攻の学生の間では差が見られなかったものの、子どもに関する英語に関しては、保育専攻の方が心理専攻よりも有意に得点が高い項目が多く、今後保育専攻において ESP 的なアプローチを積極的に英語のカリキュラムに導入していくことの有効性を報告している。

4. 調査

4.1. 調査の目的

本調査の目的は、本学の保育学科にて ESP アプローチを取り入れる可能性を探るため、英語を学ぶ保育専攻の学生の学習ニーズを探ることにある。具体的なリサーチクエスチョンとして以下の5つを設定する。

- (1) 保育を専攻する学生の学習スタイルと好みはどのようなものであるか。
- (2) 保育を専攻する学生が、卒業までに身に付けたいと考えている英語能力とはどのようなものか。

- (3) 保育を専攻する学生が受講したいと考えている英語の授業とはどのようなものか。
- (4) 保育を専攻する学生は「子どもに関する英語の授業」に対してどのような興味を抱いているか。
- (5) 先行研究にある東京未来大学の保育専攻の学生と、育英短期大学の保育専攻の学生との間に、「英語学習に対する意識」に関して相違点はみられるか。

4.2. 調査の方法

短期大学の保育専攻の学生を対象に、英語の学習に対する意識調査をアンケート形式で行った。今回の調査の質問項目の設定に当たっては、基本的には松崎（2008）のアンケートを参考にし、必要があれば質問項目を修正、追加した。

まずは(1)の「英語学習に対する学習スタイルと好み」に関して、5（当てはまる）から1（全く当てはまらない）の5段階で答えてもらった。本学の英語教育でターゲットとしていない「ライティング」についての質問項目は削る一方で、「音読」や「英語の歌」、「授業外での英語学習」についての項目を追加した。(1)の質問項目は21個である。

(2)については「卒業までに身につけたい英語能力」に関して、4（是非身につけたい）から1（全く身につけたいと思わない）の4段階で答えてもらった。(2)については先行研究の質問11項目をそのまま用いた。

また、(3)については、「受講したい英語の授業」について、4（是非受講したい）から1（全く受講したいと思わない）の4段階で回答してもらい、先行研究では別項目となっていたTOEIC、TOEFL、英検テストについての質問を「英語資格試験対策の授業」とひとまとめにした文言を使用し、9の項目を設定した。(4)では「子ども英語に関する英語の授業」について4（当てはまる）から1（全く当てはまらない）の4段階で回答して

もらった。先行研究の質問肢は12個あったが、まとめられる項目はひとつにし（例：「絵本」と「紙芝居」の2項目を「英語の絵本や紙芝居の読み聞かせ」とした）、全部で6項目とした。なお、将来の進路に関して問う項目および自由記述欄も別途設けた。

(5)については、上記(1)から(4)の育英短期大学での結果と、それぞれ対応している東京未来大学での結果（平均値）とを比較することで、保育専攻の学生の意識が4年制大学と短期大学、または地域による差があるかを調査した。

4.3. 分析方法

これらの項目に対して以下の方法で分析を行った。(1)から(4)については、質問項目別に平均値と標準偏差を算出した。その結果を平均値の高いものから低いものへと並び替え、表を作成した。

(5)については、質問項目の多くが対応している(1)、(2)と(3)について、育英短期大学の平均値と東京未来大学の平均値を対照させ傾向を探った。具体的には(1)では、対応のある調査項目について育英短期大学の上位項目と下位項目、東京未来大学の上位項目と下位項目を比較し、(2)と(3)についてはそれぞれの項目の平均値を比べるグラフを作成した。

4.4. 被験者

調査の対象者は育英短期大学の保育を専攻している学生（1年生）89名である。今回のアンケートの本調査項目の前に、「将来最もつきたい職業を下記の中からひとつ選んで下さい：1. 保育士または幼稚園教諭 2. 企業に就職 3. 公務員 4. 進学 5. まだわからない 6. その他」という質問を設定し、個々の学生の進路について調査した（有効回答数88）。結果、「保育士または幼稚園教諭」が最も多く69名、続いて「まだわからない」が12名、「企業に就職」が3名、「公務員」及び「その他」が各2名、「進学」が1名という結

果となった。このことから調査対象者の多くが、専攻である保育についての学習を活かして保育士や幼稚園教諭を第一に目指していることがわかる。つまり、今回の調査対象者には、保育に対する動機や意欲が十分である学生が多数含まれていることがわかった。

5. 調査結果

5.1. 英語学習に対する学習スタイルと好み

保育専攻の学生たちがどのような英語学習のスタイルや好みを抱いているか、その結果を、平均値の高いものから低いものへと並べたものを表1に示す。

最も平均値の高かった項目は「可能な限り、よ

い成績をとることは重要だ」で、続いて「先生が日本語で説明をしてくれるとよく学習できる」、「言葉をただ耳で聞くだけでなく文字で確認すると勉強になる」の平均値が高かった。最も平均値の低かった項目は「宿題を出してくれた方がいい」で、ついで「先生が厳しく授業をしてくれるとよい」、「授業外で英語の勉強をするのは好きだ」の順で平均値が低かった。

5.2. 卒業までに身につけたい英語能力

英語の授業を通して、卒業までに身につけたい英語能力はどのようなものか、その結果を示したのが表2である。

平均値がもっとも高かったものは、「海外に行ったとき様々な日常的状況に英語で対処すること」

表1 「英語学習に対する学習スタイルと好み」の平均値と標準偏差

項目番号	質 問	平均値	標準偏差
21	可能な限り、よい成績をとることは重要だ	4.43	0.78
6	先生が日本語で説明をしてくれるとよく学習できる	4.12	0.86
12	言葉をただ耳で聞くだけでなく文字で確認すると勉強になる	4.06	0.82
7	先生がすぐに私の誤りを正しく直してくれるとよい	3.92	0.89
10	英文和訳や和文英訳等、翻訳（訳すこと）の練習はためになる	3.89	0.85
11	英語を音読する練習はためになる	3.81	0.90
14	英語の歌を使って勉強するのは好きだ	3.76	1.07
1	他の学習者とペアを組んだり、3－4人のグループで勉強したりするのが好きだ	3.76	1.03
4	授業が教科書にきちんと沿っているとよく学習できる	3.63	0.92
13	DVDなどを使って勉強するのが好きだ	3.61	1.05
20	英語の授業の単位を落としてしまうか心配である	3.53	1.18
9	先生が教室を歩き回り、一人一人生徒に指導してくれるのがよい	3.40	0.94
15	講義形式の授業ばかりではなく、学んだことを実際に使えるような活動をするのが好きだ	3.40	1.01
2	授業中、ひとりで（ペアやグループとではなく）学習すると学習がはかどる	2.89	1.00
8	コンピューターやインターネットを使って勉強することに興味がある	2.84	1.17
5	先生がテストをしてくれたり、宿題を出してくれたりするとよく学習できる	2.56	0.92
17	他の生徒と英語で話すのが好きだ	2.56	1.00
19	海外に長期留学をしてみたいと思っている	2.53	1.32
18	授業外で英語の勉強をするのは好きだ	2.40	1.07
3	先生が厳しく授業をしてくれるとよい	2.21	0.92
16	宿題を出してくれたほうがよい	2.02	0.89

表2 「卒業までに身につけたい英語能力」の平均値と標準偏差

項目番号	質 問	平均値	標準偏差
1	海外へ行ったとき様々な日常的状況に英語で対処すること	3.39	0.75
2	英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること	3.17	0.80
4	英語の単語や熟語をたくさん覚えること	3.00	0.81
7	英語を日本語に円滑に訳すこと	3.00	0.87
9	英語の文法をよく理解すること	2.89	0.90
11	英語のきれいな発音を身に付けること	2.82	0.87
8	英語で自分自身の考えや感情について話すこと	2.76	0.92
10	英語でメールを読んだり書いたりするようになること	2.58	0.91
3	英語の本や雑誌や新聞などを読むこと	2.45	0.92
5	英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること	2.01	0.75
6	英語の専門書や論文を早く効果的に読むこと	1.92	0.86

表3 「受講したい英語の授業」

項目番号	質 問	平均値	標準偏差
6	映画やテレビ番組などを使った授業	3.34	0.85
7	英語の歌で英語を学ぶ授業	3.17	0.92
5	リスニングのコツを学べる授業	2.99	0.82
4	読解のコツを学べる授業	2.98	0.87
3	文法をしっかりと学べる授業	2.73	0.89
8	多読（簡単な英語の本をたくさん読む）の授業	2.20	0.83
2	英語のネイティブスピーカーによる授業	2.19	0.91
9	コンピューターを利用した個別自学自習時間	2.16	1.01
1	英語資格試験（英検・TOEIC等）対策の授業	2.12	0.91

で、ついで「英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること」、「英語の単語や熟語をたくさん覚えること」と「英語を日本語に円滑に訳すこと」の平均値が高かった。逆に、平均値が最も低かったものは「英語の専門書や論文を早く効果的に読むこと」で、「英語で学問的または専門的な講義を理解すること」、「英語の本や雑誌や新聞等を読むこと」がそれにつづいている。

5.3. 受講したい英語の授業

保育専攻の学生が「受講したい英語の授業」とはどのような授業なのか、その結果をまとめたものが表3である。

受講したい英語の授業として最も平均値の高

かった項目は「映画やテレビ番組を使った授業」という結果となった。また「英語の歌で英語を学ぶ授業」の平均値が次に高かった。一方で、平均値が最も低かったものは「英語資格試験（英検・TOEIC等）対策の授業」であり、「コンピューターを利用した個別自学自習時間」、「英語のネイティブスピーカーによる授業」の順に平均値の低いものが続いている。

5.4. 子どもに関係する英語の授業

保育専攻の学生が子ども英語にどのような興味を抱いているかを知る手がかりともなる「子どもに関する英語の授業」についての好みの結果を示したものが表4である。

表4 「子どもに関する英語の授業」の平均値と標準偏差

項目番号	質 問	平均値	標準偏差
2	子ども向けの英語の歌をたくさん学びたい	3.24	0.87
1	子ども達の身の回りや生活に関する英単語や表現をたくさん学びたい	3.07	0.90
3	英語の絵本や紙芝居の読み聞かせを保育園や幼稚園でやってみたい	2.41	0.93
6	子ども達に英語を使って様々な活動（歌・折り紙の折り方・工作・色塗り・お遊戯等）を指導してみたい	2.28	0.98
4	保育園や幼稚園で英語を使った指導の実習をやってみたい	2.15	0.86
5	英語で劇や人形劇をやってみたい	2.08	0.90

表5 「英語学習に対する学習スタイルと好み」の上位項目

項目番号	質問項目	育英短期大学			東京未来大学		
		順位	平均値	標準偏差	順位	平均値	標準偏差
21	可能な限り、よい成績をとることは重要だ	1	4.43	0.78	2	3.54	0.58
6	先生が日本語で説明をしてくれるとよく学習できる	2	4.12	0.86	1	3.56	0.57
12	言葉をただ耳で聞くだけでなく文字で確認すると勉強になる	3	4.06	0.82	4	3.25	0.62
7	先生がすぐに私の誤りを正しく直してくれるとよい	4	3.92	0.89	3	3.40	0.69
10	英文和訳や和文英訳等、翻訳（訳すこと）の練習はためになる	5	3.89	0.85	5	3.17	0.76

表6 「英語学習に対する学習スタイルと好み」の項目

項目番号	質問項目	育英短期大学			東京未来大学		
		順位	平均値	標準偏差	順位	平均値	標準偏差
17	他の生徒と英語で話すのが好きだ	17	2.56	1.00	21	1.77	0.81
5	先生がテストをしてくれたり、宿題を出してくれたりするとよく学習できる	18	2.56	0.92	16	2.42	0.82
19	海外に長期留学をしてみたいと思っている	19	2.53	1.32	17	2.25	1.05
3	先生が厳しく授業をしてくれるとよい	20	2.21	0.92	20	2.13	0.77
16	宿題を出してくれたほうがよい	21	2.02	0.89	19	2.21	0.96

最も平均値の高かった項目は「子ども向けの英語の歌をたくさん学びたい」で、次に平均値の高かったものは「子どもたちの身の回りや生活に関する英単語や表現をたくさん学びたい」であった。平均値が最も低かったのは「英語で激や人形劇をやってみたい」となった。二番目に平均値が低かったものは「保育園や幼稚園で英語を使った指導の実習をやってみたい」であった。

5.5. 大学間での平均値の比較

まずは、(1)「英語学習に対する学習スタイルと好み」について、各大学の上位項目についてまとめたものが表5である。

順位に多少の変動はあるが、育英短期大学での上位5項目と、東京未来大学の上位5項目が同じであるという結果が得られた。

続いて、それぞれの大学の低位項目についてまとめたものを表6に示す。

低位項目については、東京未来大学で項目番号

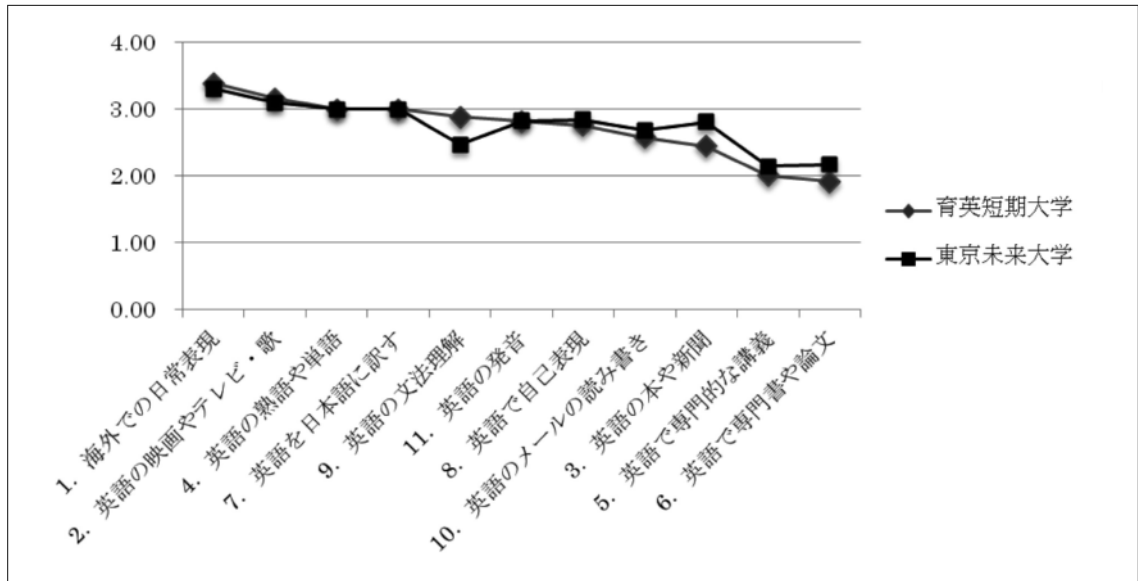


図1 「卒業までに身につけたい英語能力」の平均値比較

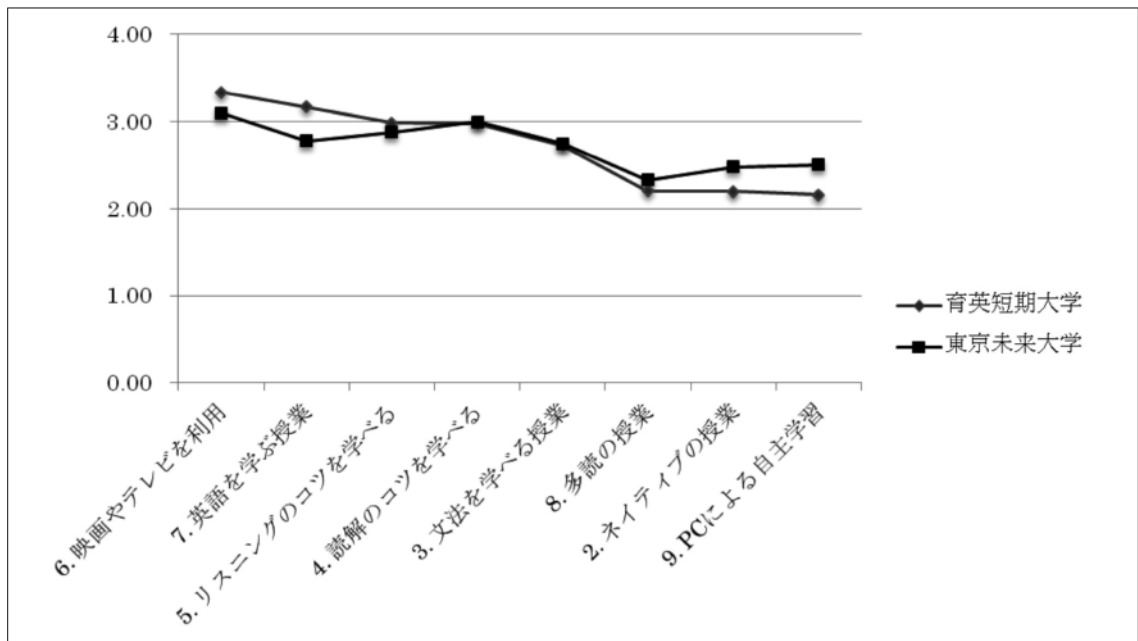


図2 「受講したい英語の授業」の平均値比較

16と同じ平均値のため19位にあたる「コンピュータやインターネットを使って勉強することに興味がある」が、育英短期大学では下位項目5つのうちに入らなかったが、それ以外の4項目が両大学で下位項目となった。

(2)の「卒業までに身につけたい英語能力」についてそれぞれの大学の平均値をグラフにしたものが、図1である。項目9「英語の文法をよく理解すること」では育英短期大学が、項目3「英語の本や雑誌や新聞などを読むこと」で東京未来大学

が、相手の大学よりも比較的高い平均値であることがわかるが、それ以外の項目では同じような平均値の傾向が見られる。

最後に(3)の「受講したい英語の授業」について、それぞれの平均値をグラフにまとめたものを図2に示す。

項目7「英語の歌で英語を学ぶ授業」において育英短期大学が、また項目2「英語のネイティブスピーカーによる授業」と項目9「コンピュータを利用した個別自学自習時間」で東京未来大学が、それぞれ相手の大学よりもはっきりと高い数値を示した。また、どちらの大学でも「映画やテレビ番組等を使った授業」を受講したいと答えた学生が最も多かった。

6. 考察

6.1. 「英語学習に対する学習スタイルと好み」の結果に対する考察

平均値が一番高かったものが「可能な限り、よい成績をとることは重要だ」であることから、学習者の英語の授業、または単位を取る事への意識は比較的高いことがうかがえる。これは英語が好きだからというよりは、将来の進路に「保育士または幼稚園教諭」を選んだ学生が多かったことから、幼稚園教諭の資格取得のために英語（またはその他の外国語）の単位が必須となっていることが影響していると思われる。また、授業内容に関わる学習スタイルでは「先生が日本語で説明してくれるとよく学習できる」、「言葉をただ耳で聞くだけでなく文字で確認すると勉強になる」、「先生がすぐに私の誤りを正しく直してくれるとよい」、「英文和訳や和文英訳等、翻訳（訳すこと）の練習はためになる」などが上位にきているが、おそらく学生が高校まで受けてきた英語の授業がコミュニケーションなものではなく、いわゆる「伝統的」な英語の授業であったためではないかと考えられる。そのような授業では日本語で文法や語彙

の説明を受け、音声よりも文字中心での導入が行われ、本文を音読して訳すことに重点が置かれていたのではないか。コミュニケーションな面を重視していない授業であるがために、英語表現に誤りがあるとすぐに訂正されるいわゆる典型的な「教科としての英語」の授業を受けてきたものと思われる。

そのために、英語に対する積極性が失われていることも、この結果から読み取れる。平均値が低かったものに「宿題を出してくれた方がいい」、「先生が厳しく授業をしてくれるとよい」、「授業外で英語の勉強するのは好きだ」、「海外に長期留学をしてみたいと思っている」、「他の生徒と英語で話すのが好きだ」の項目があることが、その理由である。「授業としての英語」または「単位としての英語」の授業のため、授業時間外では英語学習の必要性を感じておらず、先生が優しく宿題もない楽な授業の方がいいと考える傾向がある。

平均値が中間に位置しているものには「DVDなどを使って勉強するのが好きだ」、「他の学習者とペアを組んだり、3-4人のグループで勉強したりするのが好きだ」、「講義形式の授業ばかりではなく、学んだことを実際に使えるような活動をするのが好きだ」などが挙げられるが、これらが中間に位置するのは、上で述べたようにコミュニケーションな授業を受けておらず、このような授業に対する具体的イメージがないため、「好き」とも「嫌い」とも言えないという可能性が考えられる。大学では比較的交流を重視した英語の授業を目指すことが多いが、高校までの英語の授業形態が大学入学以降も学生の学習スタイルや好みに与える影響は予想以上に大きいのではないか。

6.2. 「卒業までに身につけたい英語能力」の結果に対する考察

上で述べたように、学習スタイルや好みはいわゆる「伝統的」なものを好む傾向にあったが、身

につけたい英語能力で平均値が一番高かったものは、「海外へ行ったとき様々な日常状況に英語で対処すること」、次いで「英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること」であった。この結果からは、学生がコミュニケーションかつプラクティカル（实际的・実用的）な能力を求めていることがうかがえる。このような能力は「伝統的」な授業を受けているだけではなかなか身に付かない。学生たちは、大学入学までの少なくとも6年間、英語の授業を受けてきて自分たちの求める能力が全く身に付いていないことを、自分たちのせいだと思うかもしれないが、先にも述べたように今までの授業形態が原因であることも十分に考えられる。「使える（authentic）英語」を身につけたいと考えている学生が多いことから、大学ではコミュニケーションな授業を積極的に取り入れて行く必要があるのではないかと。

また、平均値が低かったものに、「専門書や論文を早く効果的に読むこと」、「英語での学問的または専門的な講義を理解すること」が含まれることから、大学の英語の授業を通して自らの専門（保育学）を英語で身につけたいとは思っていないことがわかる。「英語学習に対するスタイルと好み」の結果とは真逆をいくようであるが、学生たちは大学での英語を「授業」としてではなく、実際に使えるものとして学びたいと感じていることがわかる。

この現実と理想の間には、学生たちが求める「英語能力」は学生たちが好む「学習スタイル」では身に付かないという矛盾をはらんでいることに注目したい。

6.3. 「受講したい英語の授業」の結果に対する考察

先に述べた「卒業までに身につけたい英語能力」同様、「受講したい英語の授業」でも平均値が高かったものに「映画やテレビ番組などを使った授業」、「英語の歌で英語を学ぶ授業」が挙げられる。

このことから学習者が「使える英語」を楽しく学びたいと考えていることがわかる。このことは、平均値の低かった項目として「英語の資格試験（英検・TOEIC等）対策の授業」や「コンピュータを利用した個別自学自習時間」といった、一見「難しそう」な項目が挙げられることから裏付けられる。また、3位と4位の「リスニングのコツを学べる授業」や「読解のコツを学べる授業」のように、「コツ」つまりは「要領よく学ぶ術」を知りたいと感じていることから、英語を身につけたいが学習方法がわからないと感じている学生が多いのではないかと考えられる。

このことから、大学では英語を教えるだけでなく、将来的にも役立つ「英語の学び方」も交えて授業を行うことが求められているのではないかと。

6.4. 「子どもに関する英語の授業」の結果についての考察

平均値の高かった項目が「子ども向けの英語の歌をたくさん学びたい」と「子ども達の身の回りや生活に関する英単語や表現をたくさん学びたい」であったことから、比較的「手頃」で、使える知識や技能を身につけたいと考えていることがわかる。また「英語で劇や人形劇をやりたい」や「保育園や幼稚園で英語を使った指導の実習をやりたい」の平均値が低かったことから、「手間」のかかることを避ける傾向があるように感じられる。

幼児英語教育が盛んになりつつあり、英語を導入する幼稚園等も増えているが、今回の結果からは学生が自ら学びたいもの、やってみたいことを挙げたに留まり、自分が保育士や幼稚園教諭になったときに、現場で幼児のために何をすべきかまでは考えが及んでいないように感じられた。幼児が楽しく英語を学び、英語に興味を持つようにするためには、自分たちにとってどのような英語のスキルやテクニックが求められるかという一歩踏み込んだ考え方を学生ができるようになる必要

があり、大学としてもそのような「教育者」としての意識を学生に持たせるような授業を行っていることが求められる。

6.5. 「大学間での平均値の比較」に対する考察

今回の調査結果と、その元となった東京未来大学でのアンケート結果とを比較してみたところ、「英語学習に対する学習スタイルと好み」ではそれぞれの大学の上位項目と下位項目の結果がほぼ同じであった。このことから、保育を専攻する学生には四年制大学、短期大学の別、または地域に関わらず同じような傾向が見られることがわかった。また、上で指摘した「高校までに受けてきた授業形態」が大学入学以降も学生の学習スタイルと好みに影響するならば、高校までの授業形態が地域によらず似通っている可能性も考えられる。

「卒業までに身につけたい英語能力」についても、平均値の上位項目と下位項目に共通点がみられ、同様に「受講したい英語の授業」でも一部の例外を除いて同じような傾向が見られた。このことは保育を専攻する学生が、「英語」に対して同じような感情や印象を抱いていることを示唆しており、この結果から日本における「幼児英語」のイメージが垣間見えてくる。具体的には「歌」や「映画」、「テレビ」といった日常的なエンターテインメントものを好む傾向にあり、このような活動を幼児英語で取り入れているのもまた事実である。また、「資格試験」や「専門的な英語」の必要性を感じておらず、これは「幼児英語」は堅苦しい英語の授業ではなく、楽しくあるべきだという考えに当てはまる。

7. 結論

今回の調査では、保育専攻の学生に対して ESP を取り入れたニーズ調査を行うことにより、大学という教育機関で学生が求めるニーズに見合った英語教育を行うには、どのような観点を取り入れ

るべきかについての示唆が得られた。

保育専攻の学生の学習スタイルと好みについては、「伝統的」な英語授業の形態を好むことが明らかとなり、その理由として学生たちが高校まで受けてきた英語の授業の影響が考えられるということだ。また、授業は「楽しく」、「負担が少ない」ものであることを好むことも明らかとなった。しかし、一方で「卒業までに身につけたい英語能力」の上位には、いわゆる「使える英語」に分類されるものがあがっており、大学でコミュニケーションかつプラクティカルな英語を身につけたいと考えている学生が多いことが明らかとなった。この二つの事実は、学生が好む学習スタイルでは学生が身につけたい英語能力は得られないという矛盾に突き当たる結果となった。大学での英語教育では学生が慣れ親しんだ「伝統的」授業を脱して、コミュニケーションに重きを置いた活動を行うことで、学生の求める能力を身につけさせる必要がある。新しい授業形態に最初は戸惑い、違和感を覚えることもあるかとは思いますが、今回の調査で学生が求めた「卒業までに身につけたい能力」は、インタラクティブな活動を通してこそ習得され得るものであり、このような活動を通して英語を実際に使うことの喜びや楽しさに気づいて欲しい。また、教師側にもクラスルームイングリッシュはもちろんのこと、日常的な表現を交え、英語で授業を行うことが求められる。

また、多くの学生が大学卒業後には「英語の授業」を受けることはなくなると思うが、職場でまたは個人的に、より高い英語能力を身につける必要に迫られる状況も考えられる。現時点では、英語を生涯学習として学び続ける場合であってもどのように英語を学ばばいいのか、その学習方法が理解できていない学生が多い。大学の英語の授業では、「英語」と併せて「英語の学び方」についても学生に提示していくことが求められている。そして英語を学ぶ立場から、ともすれば教える立場になるかもしれない学生に対し、教育者となる道

を選んだという認識をしっかりと持たせ、言語習得や「ことば」についての意識を高めていく必要がある。

育英短期大学での調査結果と東京未来大学での調査結果を比較して得られた、保育専攻の学生が抱く幼児英語教育・児童英語教育のイメージは、現状を反映するものであったことから、学生の認識の方向性は現実と大きくかけ離れてはいないことが明らかとなった。今後、幼児英語教育・児童英語教育がどのように発展していくかはまだまだ未知数であるが、学生が卒業後も英語への関心を抱き、また子どものための英語について自分の考えを持てるよう、大学での英語の授業を通して、十分な動機付けをしていくことが求められている。

本校では、学生に対して英語全般のニーズ分析を行ったが、今後は教員への意識調査や、今回の結果を踏まえたシラバスの作成と実施、またその有効性の検証が必要となってくる。学生の意見を反映しつつ、教員にとっても手応えのある効果的

な授業を目指して、今後ともカリキュラムの検討を行っていきたい。

参考文献

- 深山 晶子 (編) 『ESP の理論と実践』 (2000).
大谷 加代子 『Designing an English Course for Prospective Hairstylists』 (2003). 山野研究紀要
Kikuchi, K (2005). Student and teacher perceptions of learning needs: A cross analysis, Shiken JALT Testing & Evaluation SIG Newsletter, 9, 8-20.
大須賀直子 『保育者養成学校における ESP アプローチの実践とその効果の検証』 (2006) 秋草学園短期大学紀要、23、1-14
乳井暁絵 『ESP ニーズ分析：ファッション・デザイン及び制作にかかわる英語使用経験者の視点から』 (2008) 杉野服飾大学・杉野服飾短期大学部紀要
カレイラ 松崎順子 『ESP を取り入れた英語カリキュラム開発のための学生に対するニーズ調査—保育専攻と心理専攻の類似点および相違点—』 (2008) 東京未来大学紀要、1、77-87
寺内一 (編) 『21世紀の ESP』 (2010).

APPENDIX

保育学科の英語に関するアンケート（質問用紙）

本学では、保育学科の学生の皆様のニーズ（必要性）に合った英語教育を行っていきたいと考えており、このアンケートを今後の英語のカリキュラム作成の参考にさせていただきたいと思っております。なお、回答内容は成績には一切関係ありません。回答は全て回答用紙のマークシートに記入して下さい。質問用紙も回収いたしますので、質問用紙には何も記入しないで下さい。

0. 将来、最もつきたい職業を下記の中から一つ選んで下さい。

- ①保育士または幼稚園教諭 ②企業に就職 ③公務員
④進学 ⑤まだよくわからない ⑥その他→（ ）内にも記入願います

【1】「英語学習に対する学習スタイルと好み」に関して以下の項目について、「5：当てはまる」から「1：全く当てはまらない」まで5段階でお答え下さい。

1. 他の学習者とペアを組んだり、3－4人のグループで勉強したりするのが好きだ。
2. 授業中、ひとりで（ペアやグループではなく）学習すると学習がはかどる。
3. 先生が厳しく授業をしてくれるとよい。
4. 授業が教科書にきちんと沿っているとよく学習できる。
5. 先生がテストをしてくれたり、宿題を出してくれたりするとよく学習できる。
6. 先生が日本語で説明をしてくれるとよく学習できる。
7. 先生がすぐに私の誤りを正しく直してくれるとよい。
8. コンピューターやインターネットを使って勉強することに興味がある。
9. 先生が教室を歩き回り、一人一人生徒に指導してくれるのがよい。
10. 英文和訳や和文英訳等、翻訳（訳すこと）の練習はためになる。
11. 英語を音読する練習はためになる。
12. 言葉をただ耳で聞くだけでなく文字で確認すると勉強になる。
13. DVDなどを使って勉強するのが好きだ。
14. 英語の歌を使って勉強するのは好きだ。
15. 講義形式の授業ばかりではなく、学んだことを実際に使えるような活動をするのが好きだ。
16. 宿題を出してくれたほうがいい。
17. 他の生徒と英語で話すのが好きだ。
18. 授業外で英語の勉強をするのは好きだ。
19. 海外に長期留学をしてみたいと思っている。
20. 英語の授業の単位を落としてしまうか心配である。
21. 可能な限り、よい成績をとることは重要だ。

【2】「卒業までに身に付けたい英語能力」に関して、以下の項目については、「4：是非身につけたい」から「1：全く身につけたいと思わない」まで4段階でお答え下さい。

1. 海外へ行ったとき様々な日常的状況に英語で対処すること

2. 英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること
3. 英語の本や雑誌や新聞などを読むこと
4. 英語の単語や熟語をたくさん覚えること
5. 英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること
6. 英語の専門書や論文を早く効果的に読むこと
7. 英語を日本語に円滑に訳すこと
8. 英語で自分自身の考えや感情について話すこと
9. 英語の文法をよく理解すること
10. 英語でメールを読んだり書いたりするようになること
11. 英語のきれいな発音を身に付けること

【3】「受講したい英語の授業」に関して、以下の項目については、「4：是非受講したい」から「1：全く受講したいと思わない」まで4段階でお答え下さい。

1. 英語資格試験（英検・TOEIC等）対策の授業
2. 英語のネイティブスピーカーによる授業
3. 文法をしっかりと学べる授業
4. 読解のコツを学べる授業
5. リスニングのコツを学べる授業
6. 映画やテレビ番組などを使った授業
7. 英語の歌で英語を学ぶ授業
8. 多読（簡単な英語の本をたくさん読む）の授業
9. コンピューターを利用した個別自学自習時間

【4】「子どもに関係する英語の授業」に関して、以下の項目については、「4：当てはまる」から「1：全く当てはまらない」まで4段階でお答え下さい。

1. 子ども達の身の回りや生活に関する英単語や表現をたくさん学びたい
2. 子ども向けの英語の歌をたくさん学びたい
3. 英語の絵本や紙芝居の読み聞かせを保育園や幼稚園でやってみたい
4. 保育園や幼稚園で英語を使った指導の実習をやってみたい
5. 英語で劇や人形劇をやってみたい
6. 子ども達に英語を使って様々な活動（歌・折り紙の折り方・工作・色塗り・お遊戯等）を指導してみたい

【5】何か英語の授業・学習に関しまして要望等ありましたら、回答用紙の記入欄に自由にご記入下さい。

以上、ご協力ありがとうございました。

（2012年11月30日 受付）
（2013年1月10日 受理）